武田晴人著

『異端の試み
――日本経済史研究を読み解く』

紹介者：高嶋　修一

本書は日本経済史の「古典的な研究」を取りあげて研究史上の意義を論ずるもので，著者による東京大学大学院経済学研究科での講義録という形式をとっている。タイトルの由来は「どのような通説も，その発表当時は，異端者のささやかな試みから始まり，その当時の通説への異議申し立てであったこと，したがって，研究の発展自体が，このような異端の試みの積み重ねとして実現されていること」にあるという。研究史を踏まえないまま論文を書きはじめると，自身の研究の意義を適切に読者に説明できないばかりか，場合によっては議論を後退させてしまったりする可能性すら生じる。研究者を志す大学院生にそのような事態を避けてほしいとの願いが，原型となった講義の動機であったようだ。

全体は27章からなり，幕末維新から産業革命までを扱った「近代編」，帝国主義段階を扱った「戦間期編」，そして著者が自らの「出撃拠点」と位置づける産業史にフォーカスした「産業史の方法」，最後に東京大学での最終講義などを収録した「番外編」に分けられている。それぞれの章では例えば「第一次大戦前後の労資関係――二村一夫「労働者階級の状態と労働運動」を手掛かりに」（第18章）といったように，研究史上のトピックが掲げられ，それに対応した代表的な研究が取りあげられる。

本書の第一の特徴は，非常に幅広い範囲の研究を取りあげていることである。ひとくちに日本経済史といっても対象とする事象や年代は多岐にわたり，網羅的に論ずることは容易ではない。だが本書は幕末維新や自由民権運動，地租改正，産業革命，金融，労資関係，農業，地主制，帝国主義，戦時経済など，これまで議論が重ねられてきた領域の大方をカバーしており，本書を手にした者は著者の守備範囲の広さに感嘆するであろう。関心のある分野の研究史を繙き事典のように読むことが，本書の利用法の一つであることは間違いない。

もちろん，カバーしていない領域もある。すぐに気づくのは植民地史や戦後史が扱われていないことであるが，前者については国内の経済・社会体制にこだわってきた著者の関心のあり様に由来するのであろうし（その含意は本文中に詳述されている），後者については著者自身がより若い世代とともにこの分野を開拓している途上であるといった事情があろう。

もう一つ気づかされるのは，本書が扱うのがおおむね1960年代以降の研究に限られているという点である。戦前の山田盛太郎や大塚久雄，宇野弘蔵らに言及することはあってもそれらは言わば遠景であって直接に俎上に載せられているわけではない。また1940～50年代の講座派歴史学はほとんど検討の対象とされていない。しかしこの点を衝いて研究史のフォローが不十分であると非難するのは的はずれである。これはむしろ1960年代以降の「日本経済史」がこの時期に生じた歴史研究の多元化の中で再定置されたのであるという近年の議論（例えば松沢裕作「歴史学のアクチュアリティに関する一つの暫定的立場」，歴史学研究会編『歴史学のアクチュアリティ』所収）を想起させるものであり，

1949年生まれの著者がそうした潮流の中で研究を進めてきたことと関連させて理解すべきであろう。

以上のことを踏まえ本書を通読すると，これは単なる事典でなく著者の経済史観が色濃く反映され，方法論的な主張が強く込められた書物であることがよくわかる。それはひとくちに言えばマルクス経済学を基礎にした「伝統的」な経済史分析を重視するものであり，なかんずく労使関係／労資関係のあり方を議論の出発点に据えて社会全体のあり方を展望しようとする視座に立つものである。膨大な研究を相手に格闘する過程でこの基軸がぶれることはなく，著者による議論の体系性を強く印象づけられる。

このことは，1980年代から90年代にかけて登場した新しい方法，とりわけ近代経済学を援用した経済史研究に対する厳しい姿勢と表裏をなしているのであるが，著者は返す刀で「伝統的」な経済史研究に対する批判も行っている。一つだけ例を挙げると，比較制度分析に対して，労資関係に変化を迫るような生産力の上昇を内在的に説明し得ないと批判するのであるが，同時にそれがマルクス経済学とくに講座派的な議論と共通する面のあることを指摘するといったふうにである（101頁）。そしてこの課題は，企業内部における技術進歩や資源配分のあり方の変化に対する関心として著者自身により解決の糸口が探られていくことになる。

こうした著者の態度は，「歴史研究として独自の視点で経済発展を捉える」（540頁）ことで経済学を批判的に捉え返し得るという主張につながっていく。生産力のあり方が決定される現場（例えば企業内にビルトインされた生産性上昇を実現するための仕組み）に着目する著者は，人々にそれを主体的に選択する余地があったことを指摘し，社会のあり方は宿命的に決定されるのではなく人間自身が主体的に選択し得るものであるというメッセージを最終章で発する。そして最後には，成長段階を「卒業」してある種の定常状態に達した経済社会を展望し本書を結んでいる。

本書は「です・ます」調で書かれており各章とも導入部は平易であるが，少し読み進めるといつの間にか複雑な議論に入っていくため，読みこなすには読者にも相応の力量が要求される。しかし，日本経済史という学問分野において先人たちはかくも多くの思考を投入してきたということ，そして著者がやって見せたようになお多くの思考を投入し得る余地があるということを，読者は本書を通して知ることができる。突き詰められた高度な精神的営為が，出版物という形で結晶化されたことは，我々にとって大きな喜びと言えよう。

（武田晴人著『異端の試み ―― 日本経済史研究を読み解く』日本経済評論社，2017年10月，xiv ＋ 564頁，定価6,500円＋税）

（たかしま・しゅういち　青山学院大学経済学部教授）